

大雪女
の
逆龍衣

大泉
八雲





「がおー！」

恐ろしい声が鉛色の空の下、恐ろしい咆哮が、先ほどから降り出した厚い雪のカーテンを貫いた。

なんの前触れもなく、巨大な雪女が冬の街に現れた。

大雪女は高層ビルに白い息を吹きかけると、ビルはまたたくまに凍り付いてしまった。

大雪女の周囲がどんどん凍っていく。そのときだ、一台の戦車が現れた。地球防衛隊だ！

「ばーん！」
戦車は大雪女に向けて大砲を発射した。

しかし、弾は大雪女の体を貫通して、

遠くのビルに当たって爆発した。

「ばーん、ばーん、ばーん！」

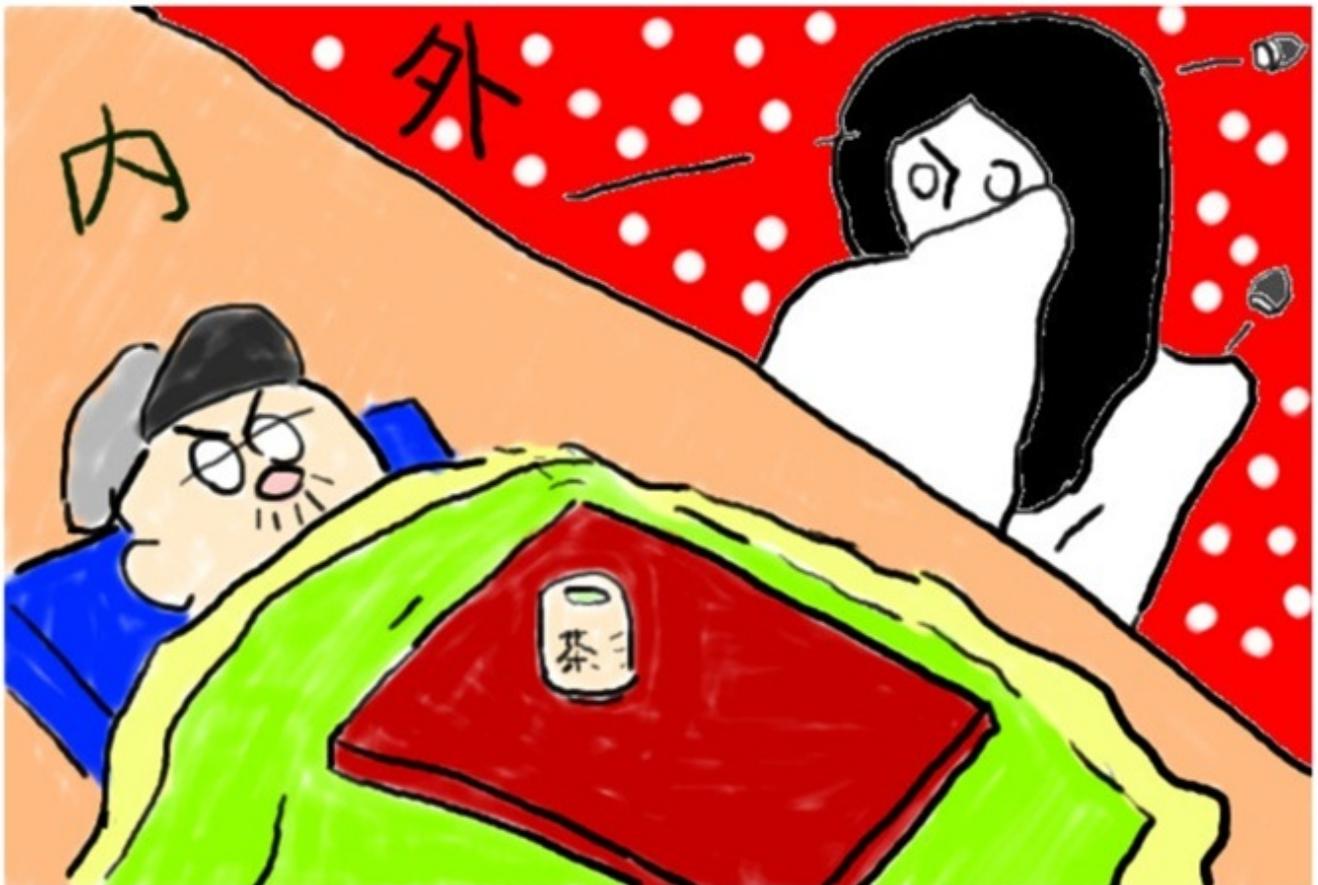
続けて大砲が発射されたが、弾は大雪女に当たることなく、背後のガスタンクや石油コンビナートや病院に当たって炸裂した。

「隊長、やっぱり前と同じです。大砲の弾が通り抜けちゃいます！」

地球防衛隊の隊員が戦車の砲座から隊長に報告した。以前、大雪女と初めて遭遇し退治したときも、大砲が通用しなかった。

「困ったなー」

隊長は、コタツの中に足を投げだし、座椅子に寄りかかり、背中から上だけが起きているような姿勢で考え込んだ。



「あの手はもう……使えませんが」と隊員は、ためらいながら言った。

「ん？ あー、ああ……」と隊長は何か悪いことを思い出したように押し黙り、体をずりずりと足のほうへ滑らせて、辛うじて首だけが座椅子の背のお陰で起きている体勢となった。コタツの布団を胸までかぶり、反対側から外に出た両足のつま先同士をとんとんとぶつけた。

無理な姿勢で手を伸ばし、コタツの上に置かれていた新聞を取ると、何を読むともなくそれに目を落とした。

前回、大雪女に勝利できたのは、大雪女はカエルが嫌いだと見抜いた隊長の天才的なひらめきがあったからだ。そして、たまたま戦車でカエルを飼っていたことが幸いした。

戦車の棚には幅30センチほどのプラスチックの水槽が置かれている。水槽の前面に貼られた名前シールには、「ケロポン」と書かれていた。

だが、水槽は空っぽで、内側についていた水垢が白く乾燥して半透明になっていた。

じつは、隊長が田んぼで捕まえたカエルを飼うと言いつき、隊員は「カエルは大変だからおやめなさい」と止めたのだが、「どうしても飼う、絶

対自分で面倒見るから」と聞かないもので、仕方なく戦車で飼うことにしたのだ。ケロポンという名前は、隊長が5秒考えて付けたものだ。

カエルは生きた餌しか食べない。そのため、ペットショップで生きた昆虫の幼虫などを買ってきて与えるのだが、案の定、隊長は「気持ちわるい」とか「虫さんがかわいそう」などと言って餌やりをしない。結局、隊員が餌やりから水替えから、すべての面倒を見ることになった。

ある日、隊員が餌をやるうとしたら、ケロポンがいなかった。逃げたのだろうかとかあたりを探したが、どこにもいない。

隊長に聞くと、隊長は読んでいた新聞から目を離さないまま、少し間をおいて、



「あつ」と声を出さずに口を開け、小さな声で「れーとーこ」と答えた。

何も世話をしないくせいに、隊長はケロポンの飼育に関してあれこれ口を出した。晩秋の木枯らしが吹くころ、隊長は、ケロポンを冬眠させないでいいのかと聞いてきた。

戦車の中は暖かいし、冬眠させる必要はない。させるなら、気温を10度以下に保つ必要がある、春に無事目覚めさせるためには、管理が大変だと隊員が説明したのだが、隊長はどうしても納得がいかない様子だった。

「冬眠させなきゃ寝不足で死んじゃう」と食い下がる。カエルは夏に起きて冬に寝るといふサイクルで生きていると、隊長は信じていたようだ。

しばらく、冬眠させるさせないで口論が続いたのだが、ある晩、隊長は隊員のいない間にケロポンを冬眠させようと、冷凍庫に入れてしまったのだ。

しかしその直後、隊長はお茶を入れたりテレビを視たりしているうちに、ケロポンのことをすっかり忘れてしまった。

ケロポンいないことを隊員に聞かれて、事態が発覚すると同時に、隊長自身もそのことを思い出したのだった。

「いつ……、入れたんですか？」

隊員は胸がざわざわするのを感じつつ隊長に聞いた。

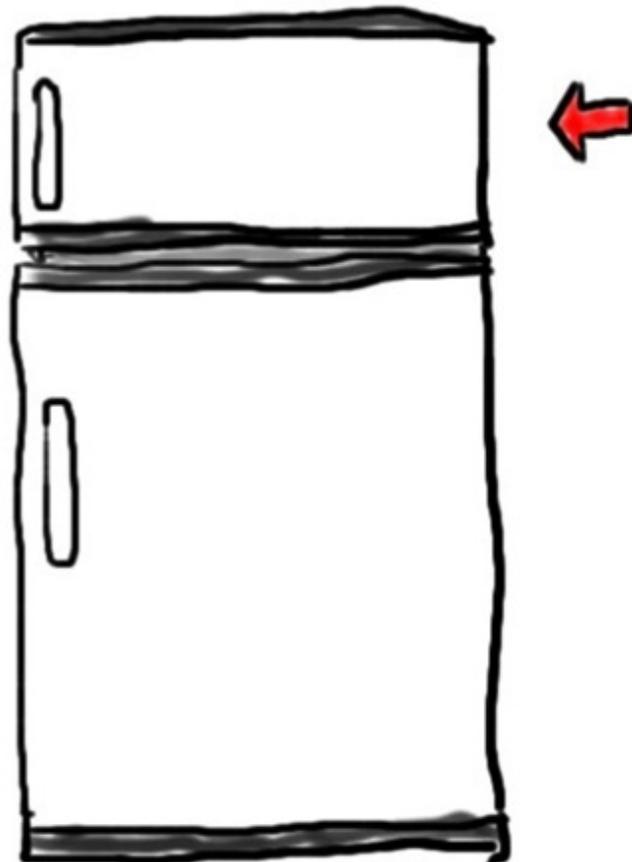
「昨日の夜う？」

隊長は言いにくそうに語尾を上げた。

隊長は、ケロポンを冷蔵庫に入れば寒くなつて冬眠すると考えていた。そうして眠ったケロポンを隊員に見せて、「ほら冬眠した」と言いたかったのだ。

しかし、冬眠に反対の隊員の目の前でケロポンを冷蔵庫に入れるわけにいかないので、隊員が戦車を離れている間に、急いで眠らせるために冷凍庫に入れたのだった。

すぐに取り出すつもりでいた。隊員が帰ってくる前に取り出して、「ほら冬眠したでしょ」と言うはずだったのだ



……。

2人は黙ってしまった。

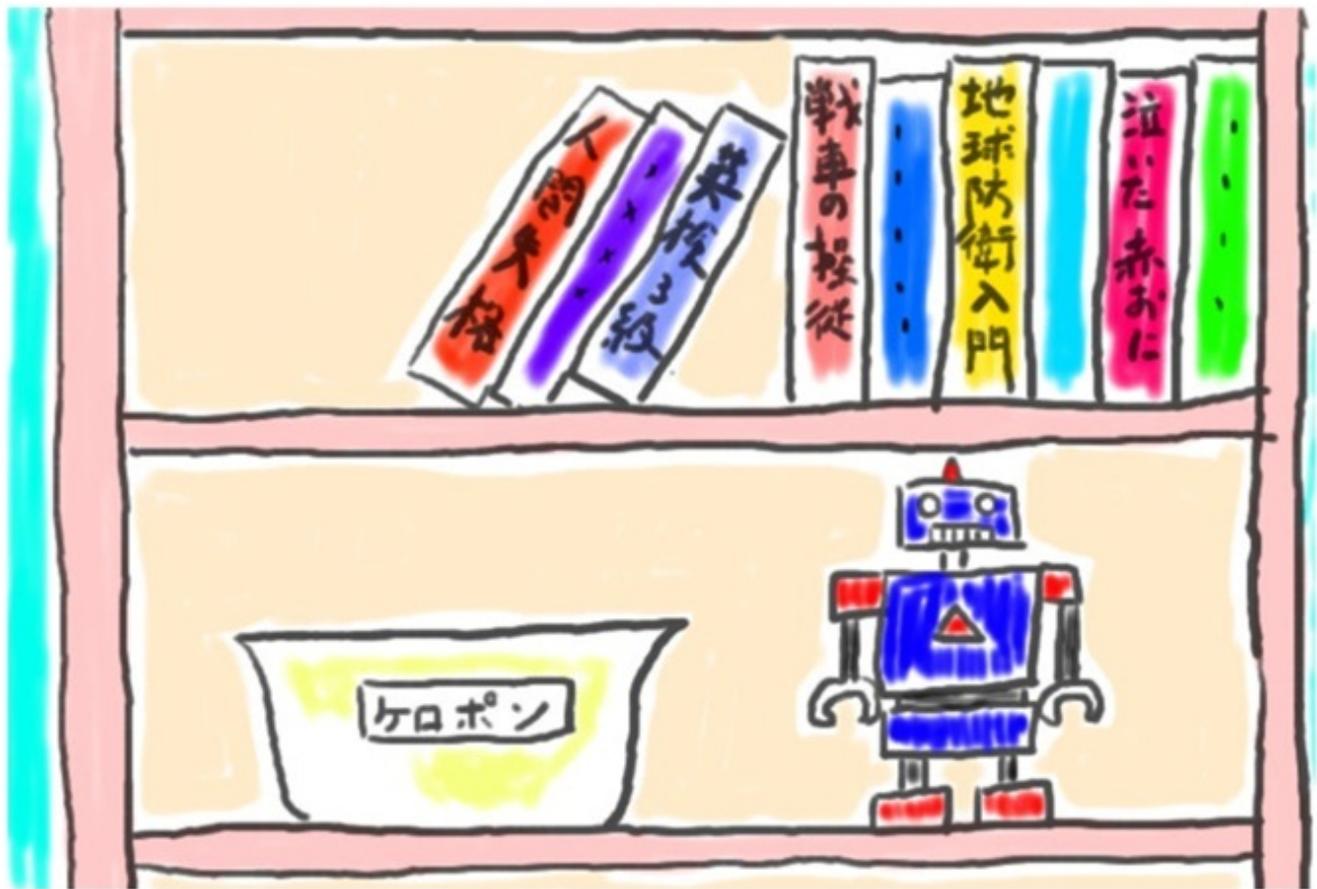
隊員は、冷凍庫の中でケロポンがどうなっているかを一瞬想像し、すぐに頭の中からそのイメージを追い払った。

それ以上、隊長を追求する気にはなれなかった。隊長はよかれと思ってやったのだ。反省しているみたいだし、しつこく聞くのはかわいそうだ。もう考えるのはやめよう。忘れてしまおう。そう隊員は思った。

それ以来、戦車の冷凍庫は誰も開けていない。この戦車には、冷凍庫を開けない、冷凍庫のことは話さない、という暗黙のルールができた。

戦車の中に重い空気の塊が停滞した。じつと新聞に目をやったまま口をつぐむ隊長は、ケロポンに対する罪悪感と、冷凍庫に入れて忘れてしまった自分の失敗を悔やむ気持ちがいっぱいで、どうすることもできないように見え

た。そもそも飼うことに同意した自分が悪い。くだらない言い争いのために、罪もない小さな命を……。隊員はそこまで考えると、頭を激しく横に振り、悪い考えを振り払った。



「もう二、三発、ばーんと撃つてみましようか」

重い空気を吹き払おうと、隊員は一度大きく息を吸い込んでから、明るい声を作つて言った。

「そうだな、派手に撃ちまくるか!」

隊長もやつと上体を起こし、隊員の気持ちを汲んでか、つとめて明るく答えた。

「そうこなくっちゃ!」

隊員は砲座に飛び乗るようにして座ると、大砲の照準器を覗き込んだ。しかし、そこに大雪女の姿はなかった。見えるのはただ、さっきの砲撃で激しく燃え上がる街の景色だけだ。

「あれ? 隊長、大雪女がいません」

隊長はハッチを開け、上半身を外に乗り出して見回した。たしかに、大雪女はどこにもいない。雪も止んで雲の間から日差しが漏れている。うっすら積もっていた雪も解けて、戦車の上には水たまりができていた。

「消えましたね」

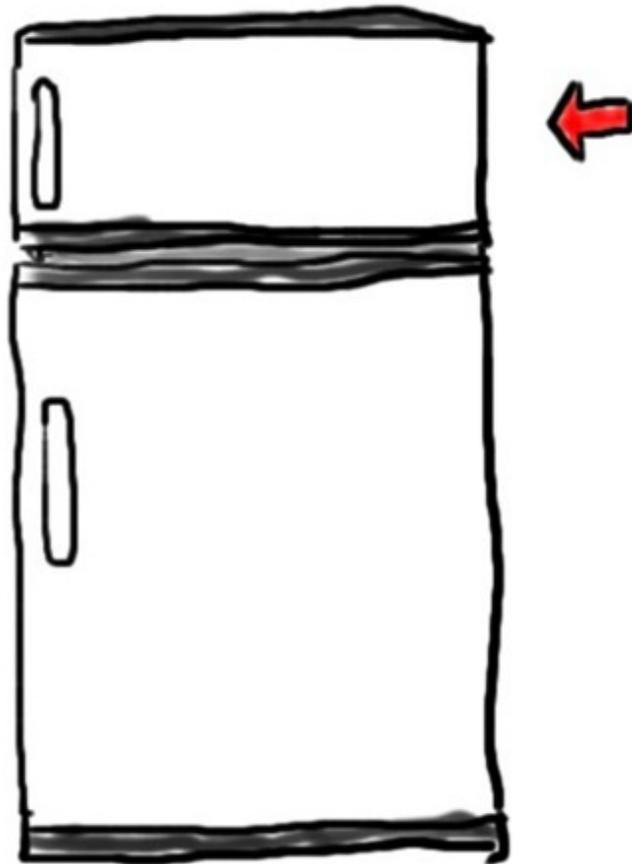
「うん、にわか大雪女だったのだろう。まんまと逃げられたな」

「でも、なんの被害もなくて、なによりのだったじゃないですか」

「そうだな。きつと、ケロポンが……」

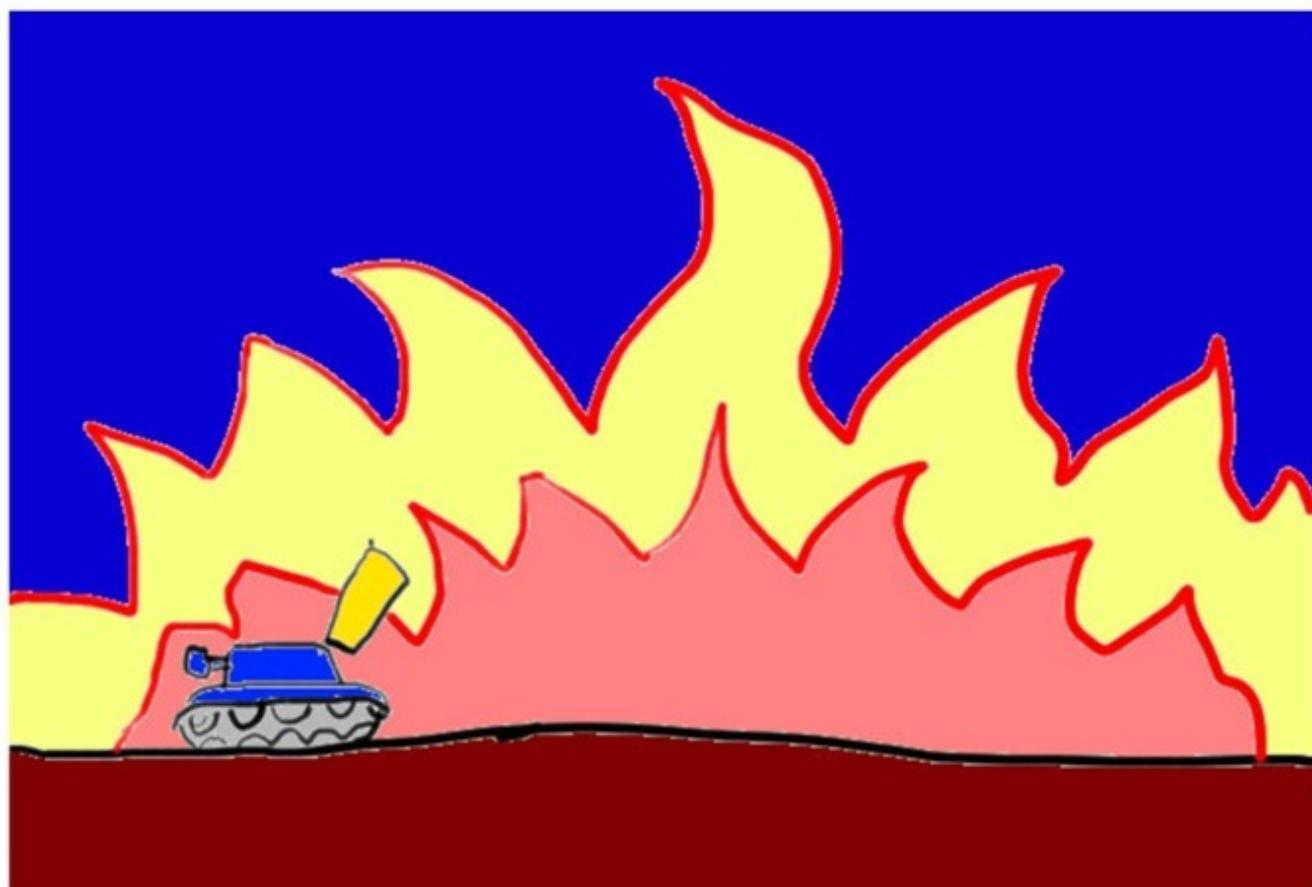
そう言いかけると、隊長の声が止まった。目には涙が浮かんでいる。

「ケロポンが我々に恩返しをしてくれたのだな」



ケロポンの

恩返し



恩返し……？ 恨まれこそすれ、恩返しだなんて。隊員は隊長の言葉に混乱した。冗談で言う内容ではない。冗談でないとしたら、どうしても恩返しなんだろう。隊員にはどうしてもわからなかった。

きつと、そこが隊長の隊長たる所以なのだろう。だから隊長なのだ。自分には絶対に真似できない、到達できない何かがあるのだ。

隊員は、そう自分に言い聞かせ、冷凍庫のケロポンと恩返しの件については心の奥底にしまい込み、戦車の操縦席に戻った。そして、静かに戦車を反転させ、燃えさかる街を後にした。

大雪女の逆襲

<http://p.booklog.jp/book/76089>

著者：大泉八雲

絵：中川善史

発行：文豪堂書店

文豪堂書店の楽しくて馬鹿みたいなブログはこちら。

<http://bungoudou.blog.fc2.com/>

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/76089>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/76089>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ